

夜明け前より瑠璃色な

Clouds and darkness are round about
A fire goeth before him, and burneth up his enemies round about
The hills melted like wax at the presence of the Lord
The hills melted like wax at the presence of the Lord
The hills melted like wax at the presence of the Lord

Moonlight Cradle



オーガストオフィシャルハンドブック

2008年秋号



P R E F A C E — ま え が き

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。

何度目かの皆様、いつもご愛顧いただきありがとうございます。

さて、表紙から早速登場していますが、今回の小冊子は新作『夜明け前より瑠璃色な -Moonlight Cradle-』の新キャラ「シンシア・マルグリット」のご紹介があります。詳しくは特集ページをご覧くださいと思いますが、物語の鍵を握るキャラになりそうです。既存のヒロインたちともども、よろしくお願致します。

最近の開発室は、MCの制作にエンジン全開中。冬頃発売のソフトを作っているわけで、日々気温が下がっていきただけでいやおうなしに緊張感も高まります。

夏が終わったと思ったら急に涼しくなったりしていますが、体調を崩さないようお気をつけ下さい。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみいただければと思います。

2008 年秋 オーガスト / ARIA 拝

CONTENTS

- 3 …… オーガスト新作
『夜明け前より瑠璃色な -Moonlight Cradle-』
新キャラクター情報公開
- 7 …… 『FORTUNE ARTERIAL』ショートストーリー
白の進化論
- 10 …… スタッフ対談
- 11 …… あとがき



夜明け前より瑠璃色な
Moonlight Cradle

『夜明け前より瑠璃色な』の 最後に現れる少女――。

冬頃発売予定のオーガスト最新作

「夜明け前より瑠璃色な -Moonlight Cradle-」には、
PC版でもPS2版でも語られることのなかった最後のヒロイン、
シンシア・マルグリットが登場します。

本小冊子で、公開できる範囲でご紹介させていただきます。

シンシア・マルグリット

Cynthia Marguerite

誕生日:6月12日生まれ(双子座) / 血液型:O型
身長:156.1 / 85D:55・83



空間に浮遊する姿は、優美でありながら、どこか哀しさすら感じさせる繊細さがあった。建物の華麗さを引き立てるべく配置された、女神の彫刻にも見える。彼女の月光をまとった髪が揺れず、静謐で楚々とした睫毛が揺れず、桜の蜜をひと筆置いたような唇が開かれなかったのなら、やはり彼女を人間とは認識できず、その美を鑑賞するのに多くの時間を費やしたかもしれない。

◆ シンシア表情ラフィラスト

外見から想像される可憐な表情が多い……かと思いきや、案外砕けた表情も多いシンシア。



■ひっくり
不意の出来事に驚いたというよりは、月と地球の価値観の相違に対する感嘆でしょうか



■インナー
白い法衣を取り去った、ノースリーブのインナー姿。シンシアはこの格好で過ごすこともあるようです。この格好だと、かなり大きい胸が目立ちます。



■ありの行進
月人にとって、魚や昆虫はほとんど嫌いな生物です。



■プロトタイプ
リボンがやや大きくお下げが無いなど、決定稿直前のプロトタイプシンシアです。



「ごめんなさい。私の個人的な趣味で傘を差さなかったんです」

夜明け前より瑠璃色な

Moonlight Cradle

Who is Cyntia??

長い金髪を一箇所に束ねた大きなポニーテールが目を引きますが、エステルなど一部の月人と意匠の似た服装も気になるどころです。月人であることは間違いないのですが、大使館関係者もどうやらこの人物が誰なのかを把握できていない様子です。主人公の達哉とは想像できない出会いを果たすことになる彼女には、一体どんな物語が待ち受けているのでしょうか。



FROM STAFFS

こんにちは、オーガストです。

今回の小冊子は、「夜明け前より瑠璃色な」最後の新キャラクター紹介となりました。

シンシアは他のヒロイン達とは少し異なった形で主人公の達哉と邂逅します。

一体どんなヒロインであるかは、今後の情報公開を楽しみにお待ち頂ければ幸いです。

もちろん、シンシア以外のキャラクターたちのシナリオ・CGも順調に制作中ですので、

こちらも今後の情報にご注目下さい。

2008年 秋 オーガスト

オーガスト新作ソフト

『夜明け前より瑠璃色な -Moonlight Cradle-』は
冬頃発売予定です

白の進化論

安西秀明

修智館学院の廊下。

片方の壁は、硝子張りだ。

そこから見える山々は、赤や黄色に染まりつつある。

秋らしい、秋。

こうして慣れない階から見ると、また違った景色に見える。

俺は、慣れない廊下を歩き、慣れない教室の扉を開けた。

俺の恋人がいるクラス。

ここに来るのは初めてだな。

「失礼します」

昼休みということで後輩たちはグループで机を囲み、談笑しながら昼食を食べていた。

扉の近くにいた生徒達の視線が、俺に向けられる。

「あ、支倉先輩だ」

「わっ、ほんとだ……」

女子たちがごによごによと『かつこいい』だ

の『話しかけちゃおうかな』とか言っているのが聞こえた。

俺は元会長たちと違って、なんの変哲もないごく普通の生徒なんだけどもな。

生徒会という名前の効果か。

恐るべし、肩書き。

「は、支倉先輩。何かご用ですか？」

女の子の一人が、緊張した様子で話しかけてきた。

「東儀さんはいるかな？」

「あ、はい、あそこに」

示された場所を見る。

教室の奥。

同年代と比べても線の細い少女が、一人座っていた。

やきそばパンを両手で持ち、もぐもぐと咀嚼するたびに柔らかなツインテールが揺れている。

教えてくれた少女に礼を言って、白ちゃんに近づいた。

「白ちゃん」

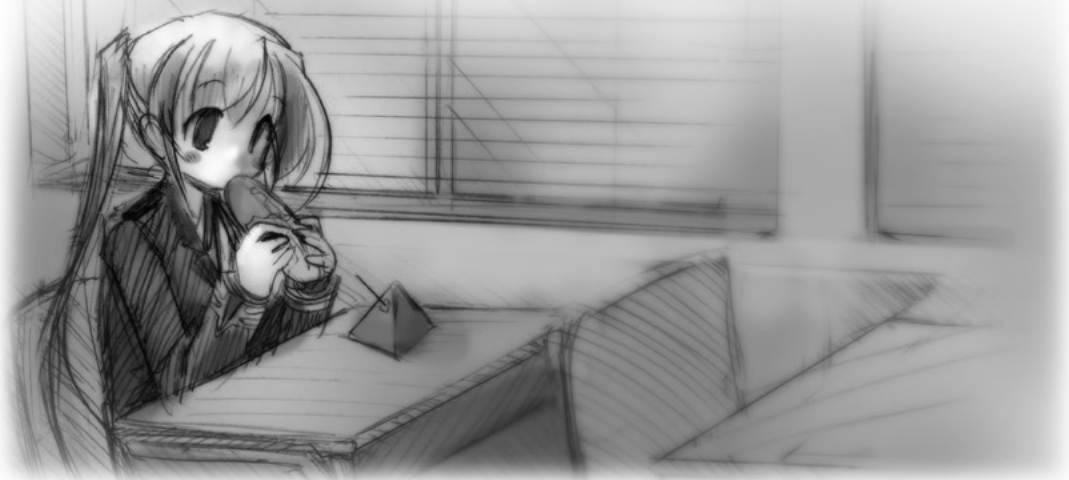
「はむ？」

焼きそばパンに口づけしたまま、透明な瞳で俺を見た。

やばい。

可愛い。

「あ、支倉先輩。こんにちは」



にっこりと微笑んで、ぺこりと一礼。

「あの、どうしてここに？」

「これを渡しに」

「あ」

瑛里華会長から預かっていた仕事用のファイ
ルを見せる。

「急ぎなんだろう？」

「はい。あの……」

「ん？」

「わざわざありがとうございます」

律儀に深々と頭を下げた。

そして、再び俺を上目遣いで見つめる。

きめ細かな頬が、桜色に染まっていた。

「どういたしました」

正直、白ちゃんともっと話したかったが、周
囲の視線も気になるので退散することにする。

「あ……」

白ちゃんがせつなげな声を出した。

「な、なんでもありません」

自分の声に照れたのか、視線を落とす。

「またすぐ、監督生室で会えるから」

「そ、そうですね」

教室から出る前に、一度振り返った。
ん。

何か違和感があるな。

教室を見渡す。

ああ、そうか。

他がグループで食べているのに、白ちゃんは
一人なのか。



放課後。

いつも通り監督生室で仕事をしていた。

「お茶です」

幼さを残す甘い声が聞こえた。

ことり、と机に俺専用の湯飲みが置かれる。

「ありがとうございます」

「瑛里華会長は、今日は戻ってこないんです
か？」

「ああ、外まわりだったさ」

お茶を啜る。

俺の好みにぴったりの味だ。

「おいしい」

「よかった……」

嬉しそうに微笑む。

「……あのさ」

「はい？」

白ちゃんは小首をかしげた。

可愛らしい仕草だ。

クラスのマスケットになるのはうってつけ
の存在じゃないだろうか。

だけど、昼食時に一人で食事。

やっぱり気になるな。

「白ちゃんつてさ、いつも一人でご飯食べて
るの？」

「えっと……」

白ちゃんは口元にほっそりとした指を当て、
考え込んだ。

「支倉先輩と食べない時は、そうですね」

「まだ、みんなと話すのは苦手なのかな？」

「そうかもかもしれません」

少し落ち込んだように答えた。

「やはり、このままではいけませんよね……」

俺と会った時から、そうだった。

彼女は、人との距離の取り方が不器用なのだ。

「いけないってことはないけど、ただ友達と
食べたほうが楽しいとは思う」

「そうですね」

こくこくと白ちゃんはうなずいた。

「わかりました。明日、挑戦してみます」

「協力しようか？」

「協力ですか？」

不思議そうな顔をした。

「グループになりやすい環境整備とか。生徒
会企画ってことでさ」

クラスメートとの結束が高まるイベント。
例えば。

うーん……。

……サバイバルゲームとか。

クラス内でグループ分けして、お互いが勝つ

ために協力。

孤島で襲い掛かる危機。仲間割れや豪雨を乗り越えて、ダイヤより硬く輝く《友情》という名の結末が生まれていく。

そして、背後から白ちゃんを見守り続ける、俺。

……なんか思考が元会長と東儀先輩みたいだ。思いつ切り職権乱用だし。

でも、白ちゃんを見ていると何か手伝いたくなってしまう。

「ふふ、支倉先輩は優しいです」
嬉しそうに微笑む。

「でも、きつと大丈夫です」

「そっか」

「支倉先輩には、もういっぱい手伝ってもらいましたから」

「え？」

「だから、もう大丈夫です」

「俺、何かしたっけ？」

「それはもう、いっぱいです」

「いっぱいか」

「はい。これ以上ないくらいに」

透明な瞳が俺に向けられる。

白ちゃんが言うようなことは、何もしていない気がするけど。

「初めて会った頃のこと、覚えていますか」

「もちろん」

「あの時のわたしは、いつも兄さまの後ろに隠れていました」

「そうだったな」

「……兄さま以外の人の話し方が、よくわからなかったんです」

思いつくように、視線を逸らした。

静かな監督生室。

引退した東儀先輩は、もういない。

「でも、先輩のお陰で話せるようになりました」

「何かしたっけ？」

「お茶会に誘って下さいました」

たしか、ちょうどお茶会を開いていた時。

俺の部屋の前にいた白ちゃんに、声をかけたんだ。

あれは、誘ったというよりも巻き込んだという方が正しいんじゃないだろうか。

「わたし、雪丸を助けてくれたお礼を言いに行つたのに……」

「うん」

「部屋の前まで来て、ノックしようか迷ってしまったってんだ」

「廊下でおろおろしていたのを思い出す。」

「そうしたら、先輩が手を引いてくれて……」

嬉しそうに、自分の手を見つめた。

あの時は、ちょっと強引すぎるかなと思つた

けど。

そうしなければ、白ちゃんは部屋の前から立ち去っていたのかもしれない。

「最初はすごく緊張しましたがけど、お茶会の皆さんと仲よくなることができました」

今では、なんの遠慮もなく話すことができる関係になった。

「わたしは、変わることができました」

眩きにも似た小さな声が、室内に響く。

「支倉先輩がきっかけをくれたんです」

そう言つて、透き通るような微笑みを浮かべた。

「クラスの人たちとも、同じように仲よくなりたいって思つていたんです。でも……」

「きっかけが無かった？」

「あるいは勇気が。でも、さつき支倉先輩がくれました」

俺が言い出したからか。

そう思つてくれるなら、言つてよかつた。

「クラスの人たちと仲よくなって、お昼ご飯を一緒に食べて、放課後に遊んで、休日も一緒に過ごして……あ」

「どうした？」

「困りました……。そうなつたら、支倉先輩

といつ会えばいいんでしょう？」

泣きそうな顔をしながら言つた。

「それは……」

俺も返答に詰まった。

「あ、思いつきましたっ」

ぽんっ。

白ちゃんは、両手を胸の前で合わせて言った。

「先輩も一緒なら問題ありません」

「一緒に遊ぶってこと？」

「はい」

想像してみた。

俺と、

白ちゃんと、

後輩ズ（多分女の子）。

……それはデートと言えるのか。

「あれ、ダメですか？」

「ダメとまでは言わないけど……」

俺が後輩なら、先輩がいたら話にくいかもしれない。

「そ、そうですか……」

しゅん。

端正な顔を俯かせる。

心なしかツインテールが萎れた花のように見えた。

まずい、落ち込ませてしまった。

「あー、俺との時間は気にしなくてもいいよ」

「え……」

白ちゃんは自分のスカートをぎゅっと握った。

紅瀬さんに『おいしそう』と言われた時の雪

丸の目で、俺を見つめる。

「俺との時間は、女子フロアに忍びこんで

もなんとかするから」

「そ、そうですか」

白ちゃんの顔に、安堵が広がる。

「支倉先輩が言うのであれば、そのように」

「白ちゃんは素直だな」

「あ……」

頭を撫でると、くすぐったそうに身をよじった。

「支倉先輩はいつもわたしのことを思って、

正しいことを教えてくれますから」

透明な瞳には、信頼の色が浮かんでいる。

「お陰で、いっぱい成長できてるんです」

そう言っつて、白ちゃんは微笑んだ。

「先輩、これからも色々教えて下さいね」

その名前のような無垢な表情。

無地のキャンパスのような女の子だと思っつ。

彼女はこれから、窓の外の景色のように鮮やかに変わっていくのだろう。

—— 珠津島の山々は、もうすぐ最も美しい季節を迎える。

END

END



べっかんこう(以下べ):今回も対談の時間がやってきました。

榊原拓(以下榊):なんと、今回の小冊子では新キャラが登場しましたよ。

べ:シンシアさんですね!

榊:しかも、この対談が載る小冊子の表紙からして、すばつとシンシアさんです。

べ:わーわー! シンシアさんポニーテールですよ。

榊:なんか表紙では、なんか寝たままふわふわ浮いてますが、これは何をしてるんでしょう。

べ:寝てます。くうくう。

榊:まんまがよ! って言うが、普通の人は浮かんで寝たりしませんから!

べ:これがロステクつてやつですね。まあ服からして一般人じゃなさそうですが。

榊:エステルの服に似てるような。

べ:どういった人なんでしょうが。……うう、言いたくないなあ(笑)

榊:そこはくつと抑えて。メインビジュアルの立ち絵は、素直で天真爛漫つまい感じですが。

べ:明朗快活な感じですよ。おバカじゃないですね。

榊:この本のどこかに、素の彼女についてのヒントがあるかも知りません。

べ:なんと!

榊:そして苗字はマルグリット。マルグリットと言えは……!

べ:あのお方……!

榊:あとはご想像にお任せする感です。

べ:翌の続き、夜明けの不足していたポニー分を充填して下さい。わづほう!

榊:そういえば、MC を発表した後、期待の声を沢山頂きました。もう PC 版の本編を発売してから3年経つというのに、本当にありがたいことです。

べ:ですね。思えば長い付き合いです。

榊:作品やキャラを、長いこと好きにてもらえるというのは嬉しいですよ。単純な作り手として。

べ:今回は、なんとというか同窓会のような気分もありますね。みんな元気で暮らしてるんだなあ、みたいな。

榊:そりゃ元気ですよ! っていうか幸せな感じ。もうどんどん幸せになってしまえばいいよ!

べ:幸せモードからスタートだからなあ。

榊:ふわふわ。幸せモードばかりとは限りませんよ。ゴールだ! と思っただ地点がスタートだった、というのはよくある話です。

べ:ほくたちの戦いはこれからだ!

榊:打ち切られてますが(笑)……さて。冬頃発売となっておりますけど、この「冬頃」っていつなんでしょうか。

べ:冬は冬だよ!

榊:具体的な日付で発売日を発表してから延期はしたくないので、もう少々お待ち下さい。

べ:でもまあ開発は順調に進んでおるですよ。

榊:寒い冬が明ける前、皆様の心が温まる作品をお送りできればと思ってます。……とかまとめづまいこと言ってみたりして。

べ:お、上手いこと言うね。では温まる絵を描く仕事に戻ります。

榊:私も私も。

スナップ対談 第21回 べっかんこう & 榊原拓



2008.10.2 22:30 社内にて

POSTSCRIPT - あとがき

オフィシャルハンドブックをお読みいただき、ありがとうございました。
お楽しみいただけましたでしょうか。

ここで少しだけ補足説明をさせて頂きたいと思います。

「夜明け前より瑠璃色な -Moonlight Cradle-」はいわゆる移植版ではありません。世界観はPC版やPS2版と同じですが、全て新規のシナリオで構成されている新作です。(もちろんHシーンも新規書き下ろしです。)また、「夜明け前より瑠璃色な -Moonlight Cradle-」では、「PS2を持っていないのでPS2版はプレイできなかった」「PS2が居間のテレビに接続されているので、PS2版はプレイしにくい」という声にお応えして、「PS2版をそのままWindowsPCでプレイできる『PS2版同梱パック(仮)』を製作致します。もちろんPS2版が同梱されない通常パックも製作しますので、PS2版を既にお持ちの方が新たに同梱パックの方をお求め頂く必要はありません。

ごく稀にですが、以上の点についてお問い合わせを頂くことがありましたので、改めてご説明させて頂きました。もしも皆様の周囲に思い違いをされている方がいらっしゃいましたら、是非お伝え頂きますようお願い申し上げます。

『FORTUNE ARTERIAL』ですが、こちらの展開も水面下で進んでいます。
さらには全く新規の作品も進行しています……が、まずは近頃のMCに全力で取り組みたいと思います。

それでは、今回はこの辺で。
今後とも、オーガスト/ARIAをよろしく願い致します。

2008年秋 オーガスト/ARIAスタッフ一同

FORTUNE ARTERIAL

—フォーチュン アテリアル—

夜明け前より瑠璃色な

Cradle and Arterial. The first and second titles of the series.
A few girls before him, and beneath the first person, the world existed.
The hills under the sky of the present, the whole earth.

Moonlight Cradle

オーガストオフィシャルハンドブック
2008年秋号

※禁断転載・無断複製

最新情報満載!
オフィシャルホームページにぜひお越し下さい!

<http://august-soft.com/>
<http://aria-soft.com/>





夜明け前より瑠璃色な

Clouds and darkness descend about
A fire goeth before him, and burneth up his
The hills melted like wax at the presence of the Lord, and trembled.

Moonlight Cradle

オーガストオフィシャルハンドブック
2008年秋号

